

# カントウータ

## Cantuta

## No.2

平成 14年 11月発行  
(社) 日本ボリビア協会

### 定期総会および会員親睦パーティ開催される!

平成 14年 7月 6日、中央区銀座サロン・ド・ジュリエにおいて平成 14年度の定期総会が開催されました。総会終了後、会員親睦パーティが開催され、木下尊淳氏のフォルクローレ・ミニコンサートでボリビア音楽を楽しみました。

### 事務所の移転について

(株)フジタの川崎会長がボリビア名誉領事職を返上するに伴い、ボリビア名誉領事館および当協会もそれぞれ借用していた(株)フジタの建物内にある部屋を明渡さなければならなくなりました。ボリビア国は大使館に領事担当官を本国より派遣し大使館内で領事業務を行うことに決定し、領事館はそちらに移転しました。当協会の事務所については新たな事務所を物色中ですが、正式な移転先が決まるまで緊急避難的に下記の住所に移転することになりました。

〒151-0053

東京都渋谷区代々木 1-58-10

第一西脇ビル 1階

TEL 03-5333-2488 FAX 03-3370-0143

AVISO

Tenemos el agrado de informar a todos los interesados que nuestra oficina se mudo a la siguiente direccion:

〒151-0053 Asociacion Nippon-Bolivia

Daiichi Nihiwaki Bldg. 1er piso, 1-58-10

Yoyogi, Shibuya-ku, Tokio

TEL 03-5333-2488 FAX 03-3370-0143

### 具志堅興貞さん受賞

ボリビア国オキナワ移住地の具志堅興貞さんが、春の叙勲で、勲六等単光旭日章の受賞をされました。具志堅さんは長い間、第一移住地およびオキナワ農牧総合組合(CAICO)の幹部として、移住地ばかりでなく、ボリビア国の日系人社会の発展に、指導的役割を果たされてきました。(渡邊英樹談)

### 西山篤視さん受賞

元サンファン日本ボリビア協会長の西沢篤視さんが、秋の叙勲で、勲六等瑞宝章を受賞されました。その温厚な人柄と中庸の精神で、移住地内の諸問題の解決に当たって来られた功績は、地味で目立たぬながら、大なるものがあります。(渡邊英樹談)

### **ボリビアの話題**

#### バンセル元大統領の葬儀

5月6日(月) ボリビアの現代史において重要な役割を担ったバンセル元大統領の葬儀が、晩年を過ごしたサンタクルス市で行われた。

外国の高官で葬儀に参列したのは、チリのリカルド・ラゴス大統領のみで、ベネズエラのウーゴ・チャベス大統領、エクアドルのグスターボ・ノボア大統領はじめ他のラテンアメリカの指導者たちは、葬儀当日までに到着できなかった。

バンセル氏は75歳、5月5日(日)

肺癌(肝臓や脳へも転移)で亡くなった。

葬儀は、ホルヘ・キローガ大統領(当時)主導の下に多くの政治家、外交官、民間人などが参列して執り行われた。遺体は、サンタクルス市の自宅での通夜の後、翌朝兵士たちの手で市の大聖堂へ運ばれ、そこで葬儀のミサが行われた。

その後、兵士たちに担がれた棺が、沿道を埋めた支持者や市民たちに見送られて総合墓地へ運ばれ、バンセル家の墓地に埋葬された。

バンセル氏は、1971年に左翼政権をクーデターで倒し、1978年まで大統領を務めた。1997年には、憲法に基づき、議会で大統領に選出され、2001年まで務めた。

チリのリカルド・ラゴス大統領の葬儀参列は、領土紛争のため1978年以降外交関係が断絶されている両国の関係改善に役立つと、ボリビアの政治家や政府筋から高く評価されている。

## ワールドサッカーで遅れた大統領選挙

ワールドサッカーの決勝戦でブラジルがドイツを破って優勝した喜びにボリビア中が沸いたため、6月30日(日)に行われた正副大統領と上下両院議員選挙の投票開始が1時間ほど遅れた。

今回の選挙は、正副大統領と27名の上院議員、130名の下院議員を選ぶもので、人口820万人のうち410万人が投票有権者であった。

大統領選挙については、11人の候補者のうち、過半数を得票する者は1人もなく、1985年以降に行われた全ての選挙と同様に、議会での決選投票に持ち込まれた。

アンケートの結果によれば、ボリビア人全体の83%が、決選投票も国民の直接選挙とする制度に変更すべきだとの意見を持っているが、そのためには、憲法の改正が必要である。

## 大統領決選投票と就任式

6月30日の大統領選挙で、過半数を得票した候補者がいなかったため、8月4日、1位、民族革命運動(MNR)のゴンサロ・サンチェス・デ・ロサーダ氏(72歳、得票率26.8%)と2位、新共和勢力(NFR)のマンフレッド・ビリャ氏(47歳、得票率26.5%)との間で、上下両院の国会議員による決選投票が行われ、サンチェス・デ・ロサーダ氏が過半数を獲得して、大統領に選出された。

これを受けて、8月6日に大統領就任式が、ラパス市の国会議事堂で、スペインのフェリペ皇太子、ペルーのトレード大統領、ベネズエラのチャベス大統領等諸外国の要人や国際機関の代表等多数が参列して行われた。

日本からは自見庄三郎衆議院議員(日ボ友好議員連盟会長)が特派大使として参列した。

サンチェス・デ・ロサーダ新大統領は、1993年から97年まで大統領を務めた経験があり、政権担当は2度目。実業家の出身で、市場経済を重視する経済政策の手腕は、米国をはじめ海外から高く評価されている。

## 新閣僚の任命

8月6日、サンチェス・デ・ロサーダ政権の新閣僚が任命され、任命式が行われた。閣僚名簿は次の通りである。

- 1) 外務・総務大臣 カルロス・サーベドラ・ブルーノ(Carlos Saavedra Bruno)
- 2) 内務大臣 アルベルト・ウェルネス・ガセル・バルガス(Alberto Werner Gassrer Vargas)
- 3) 法務大臣 ヒナ・メンデス(Gina Mendez)
- 4) 国務大臣 フレディー・テオドビク・オルティス(Freddy Teodovic Ortiz)
- 5) 地方自治体開発大臣 エルナン・パレデス・ムニョス(Hernan Paredes Muños)

- 6) 大蔵大臣 ハビエル・コンボニ (Javier Comboni)
- 7) 持続開発・企画大臣 ホセ・ギリエルモ・フスティニアノ (José Guillermo Justiniano)
- 8) 大統領府大臣 カルロス・サンチェス・ベルサイン (Carlos Sanchez Bersain)
- 9) 農業大臣 アルトゥーロ・リエルベルス (Arturo Liebers)
- 10) 住宅整備大臣 カルロス・モラレス・ランディバル (Carlos Morales Landivar)
- 11) 金融事業大臣 (無任所) フランシスコ・スアレス・ラミレス (Francisco Suarez Ramirez)
- 12) 農民・先住民・女性・世代問題担当大臣 (無任所) シルビア・アンパロ・ベラルデ・オルモス (Silvia Amparo Veralde Olmos)
- 13) 貿易大臣 フアン・カルロス・ビレイラ・メンデス (Juan Carlos Virreira Mendez)
- 14) 経済開発大臣 オスカル・ファルフアン・メアリア (Óscar Farfan Mealla)
- 15) 教育大臣 イサク・マイダナ・キスベルト (Isac Maidana Quisbert)
- 16) 労働大臣 ハイメ・ロランド・ナバロ・タルディオ (Jaime Rolando Navarro Tardio)
- 17) 保健大臣 ハビエル・トーレス・ゴイティア・カバリエロ (Javier Torres-Goitia Caballero)
- 18) 炭素水素エネルギー担当大臣 未定

## **ボリビアと私**

林屋永吉

1941年の5月に外務省の留学生としてスペインへ渡った時から、1984年12月に退官するまでを数えると、私の外務省生活は43年にも及ぶ。その間26年間は海外で過ごしたが、楽天的で陽気なスペインとラテンアメリカの国々の任地は、どこもまことに楽しく過ごさせてもら

った。

思い出は数多い。大使になって始めて勤務したボリビアには3年いたが、在任期間の一番短かったボリビアではあった。随分古くからの結びつきがあり忘れえない思い出が残っている。

1955年の11月、最初のメキシコ勤務を終えて帰国し配属された移住局第一課で、私の担当した仕事がボリビアとの移住協定だった。といっても私に残されていた仕事は条約局との字句の調整程度で、内容的には既に固まっていたが、終戦後まだ10年も経過していない当時の日本にとっては、一家族当たり50町歩が無償で与えられ、1000家族まで受け入れられるというのは大変な朗報であったに違いない。実際問題としては、受け入れ態勢の不備やら何やらで、サンタクルス移住地の初期の入植者は大変な労苦をされることになったのだが、当時の日本政府にも現地の不備を抜本的に改善するだけの力はなかった。我々は本省のデスクで入植第一陣、第二陣の幾多の困難を綴った報告を手にし、どれほど心を痛めたか分からない。

サンタクルスの移住地を実際に訪れたのはそれから約10年後、確か1967年の3月だったと思うが、私はアルゼンチンから帰国して移住事業団に出向していた。当時移住地は道路問題、水害対策、生産物の市場問題等々幾多の困難な問題を抱えて苦闘していた。サンタクルス移住地は当時の海外移住事業団の最重点施策地区となっていたが、換言すれば、投入される予算は「焼け石に水」に近かった。

それからまた10年余を経過して思いがけずボリビアに勤務することを命ぜられた時、真っ先に頭に浮かんだのはあのサンタクルス移住地だった。

1978年8月16日に御信任状をペレダ大統領に奉呈し、首都における最小限度の儀礼訪問をすませるとすぐに私はサンタクルスを訪問した。そして官憲往訪後、サンフアンと沖縄の両移住地にそれ

ぞれ一泊した。町で泊まることをすすめてくれる人が大方だったが、私は20年前に読んだ悲報に近い報告書や、10年前に見た状況が忘れられず、どうしても現地でその後の生活の模様を生声でゆっくりと聞きたかった。

幸い星空の下に集まってくれた人々には当時の苦労を過去の思い出話として笑いを交えて語ってくれた。20年間の苦労の跡は額にも頬にも確かに刻み込まれてはいたが、幾多の人々が耕地を捨てて去っていったにもかかわらず、自分はこの地に留まって、ともかくも生活の基盤を確立したという自信に満ちた声は明るかった。そして翌朝回ってみた耕地には大きなトラクターが並び、鶏舎が建てられ、しかも幾つかのロッジでは本建築による住宅建設が始まっていた。20数年余にわたる彼らの努力はようやく実を結び始めていたのだ。

私がポリビアに在勤したのは1978年の8月から1981年の7月までのちょうど3年間だったが、政治的には誠に不安定な時期で、任期中に6回の政変に遭遇した。それでもクーデターとクーデターの間を縫って国内を歩き回り、9つの州の首都や日本に関係のあった町は残らず公式に訪問した。どの旅も思い出深いだが、とりわけ1979年の9月日本人会の井門会長を誘って実施した、ベニ、バンド両州のリベラルタ、グアヤラメリン、コビハ、トリニダードの4市訪問は最も印象深い旅であった。

これらの町々はポリビアの日系人移住の草分けとも言えるアマゾン源流地域にあって、1914年から20年頃にかけて多くの日系人がペルーからアンデスを越え、マドレ・デ・ディオス河を下ってこの地へやって来た。そしてその頃リベラルタの町には300人から400人の日系人が住んでいたというが、彼らは主として生ゴムの採取に従事し、当時金貨で支払われたという高賃金でかなり裕福だったようで、その多くが土地の堅実な家庭の子女と結婚した。市長の話では現在

の町の人口6000の内、約半数は日系人の名を保有しているというが、そう言われてみれば町行く人々は皆日系人のようで、ポリビアの奥地にこんな町があるうとは全くの驚きだった。にわかの歯痛に苦しんで飛びこんだ三世の歯医者さんの手際良い処置振りや、その昔、盛大な天長節を祝ったという日本人会館、生ゴム処置工場等の訪問に同行してくれた日系の青年達の日本に対する限りない憧れ、そして彼らの日本語習得への強い希望等々。リベラルタでの3日間は我々に強い心証と幾つもの課題を与えてくれた。

当時この地域で採取された生ゴムは、国境の町グアヤラメリンを通過してブラジルへと搬出された。従ってこの町は河港として栄え、アマゾンの密林で働く若者達の命の洗濯場でもあったようだが、今は往時の面影も無く、対岸のブラジル領の町とは比べ物にならないほどの寂れようだった。この町で会った三世のお嬢さんは前年度のミス・ポリビアに選ばれたという美人で、街の人気者どころか名士になっていた。

バンド州の首都コビハはポリビアの最北東端、これまたブラジルと国境を接する小奇麗で明るい町だが、ここでも三世のお嬢さんが土地の銀行の要職を占めなかなかの活躍ぶりだった。そしてこの地で会った3人の一世たちのかくしゃくたる姿にはすっかり驚かされ、その内の1人がわが国の外交政策についてまで熱心に質問するのに全く感嘆してしまった。

この地域に活躍していた日本人の多くは1920年代の後半ゴム景気の衰退と共に、トリニダード、サンタクルス、ラパスへと散って行った。そして中間地点に当たるトリニダードには一時かなりの数の日本人が住んでいたようで、今日ポリビアの政・財界や文学畑で活躍する日系人にはこの地の出身者が多い。

多くの人々の好意に接し、多くを学んだ旅だった。私はラパスに帰って、戦前、

戦後の困難な時期に多数の同胞を温かく迎え入れ、その子孫が今も活躍しているこうした地域こそ、我が国の経済協力を優先的に行うべきだと、改めて痛感したのだった。

## ポリビアで活躍する日系人

—その1の2—

### 詩人ペドロ・シモセ

細野豊

「カントゥータ」No.1で、ポリビアの日系詩人ペドロ・シモセとその詩について紹介しましたが、これに対して、JICA日系社会青年ボランティアとして、サンタクルス市のコロニア沖縄農牧総合協同組合で組合情報誌 CAICO NEWS の取材・編集及び日本語文章の作成を担当しておられる佐藤明子さんからお手紙を頂きました。そこには、次のように書かれていました。

「『カントゥータ』を拝見していて、特に目を引いた記事は、ペドロ・シモセの人物紹介と彼の詩です。彼の波乱な人生模様の背景に見えてくる詩の世界には、空想と共に映像まで見えてきそうな勢いがあります。数回にわたるシリーズということなので、今後も楽しみにさせていただきます。

地理的には遠い日本とポリビアですが、人と人との交流、文化のつながり、日本の個々を大切にしたい社会を毎日目のあたりにしていると、日本を身近に感じます。

現在、ポリビア国において日系団体、農協組合の目覚ましい活躍の高さは、開拓に当たった一世の方達の賜物だと痛感し、改めてフロンティア精神に頭が下がる思いです。一世から二世に世代交代の時期とも言われている昨今だそうですが、毎日現役で元気に過ごされている一世の方達の姿を見ると、私の方まで力が湧いてきます。この気持を忘れずに、2年の任務を遂行したいと思っています

す。」

そこで、戦前にポリビアへ移住し、一世としてご苦労され、また活躍もされた方々を偲ぶ意味からも、今回も引き続きペドロ・シモセを取り上げることとし、前回掲載した「わが父の伝記」と共に彼の尊父下瀬甚吉氏のことを謳い代表作一つともなっている「OTOSAN」を掲載することとしました。

佐藤明子さんには、心から感謝申し上げますと共に、今後ともご感想、ご意見などをお寄せ下さいますようお願いいたします。

OTOSAN (1882-1970)

あなたの死はあらゆる所にある。

それは  
ぼくの空間の概念を打ち壊す。

それは夢見、  
あなたのサンダルの側で、  
菊と雨漏りの側でぼくを目覚めさせる。

昨日、

ぼくの手は傘を捜していた。  
あなたはぼくの中に火を、熱狂の熱さを  
降らせる真実であった。

だがもうあなたはおらず、  
ぼくはあなたの名前を  
小声で口ずさむ

(思いがあなたに話す)  
そしてあなたは

木材のまどろみの  
なかをひっそりと歩く、  
あなた自身に

似ているものは何もなく、  
あなたに追い付く音は  
まったくない。

もはや庭に静けさはなく、  
音楽も薔薇もない。  
ただ時間があるだけ。(いつかぼくは  
なぜ花たちがあなたを好きなのか知る  
だろう。)

あなたの死は

あらゆる処にあり、  
ぼくは  
あなたを  
強く  
抱きしめようと  
決め手となる合図を  
待っている。

詩集「消えそうな火」(1975)より

## 雲の上のゴルフ

渡邊英樹

ポリビアの標高差は、アマゾン河流域の低地から、アンデス最高峰まで、大雑把に言えば 6000 メートルもあり、その高低差がもたらす気候は、一日の中に熱帯から寒帯までが併存していると言われています。

ゴルフ場も首都ラパス市にあるのが、北アルプスの槍ヶ岳とほぼ同じ高さの 3200 メートル、コチャバンバ市のものが八ヶ岳の赤岳に匹敵する 2800 メートル、そしてサンタクルス市のものが 400 メートルと著しい標高差です。

ラパス市のゴルフ場は世界一高いところにあるゴルフ場として、つとに有名で、雨による侵食で、深い谷の中に、教会の尖塔のように突き出した土塊が、何十本と林立するような荒涼たる景観を呈するバージェ・デ・ルナ(月の谷)を越えてのティーショットは、かなりの緊張を強いられます。

我がボールは、音もなく、その尖塔の間を奈落の底に吸い込まれるように、はかなく、どこまでも深く落ちていきました。つらいのは、ボールの行方だけでなく、ショットとショットの間の歩行にあります。

登り傾面を歩いた時など、しばらく立ち止まり呼吸を整えないと、次の動作には入れません。全般の歩行も、空気が薄いこともあいまって、足元が地に着かないというか、雲の上を歩いているようなおぼつかないさを感じるのです。

成田からリマまで直行で行って、リマ

一泊でラパスに着き、翌日プレイをしましたが、昼夜が完全にひっくり返る 11 時間の時差ボケと、24 時間近いフライトの旅の疲れとで、全くゴルフになりませんでした。

それでも、褐色の不毛の大地の中に、そこだけが鮮やかな緑を作っているこのゴルフ場で、もう一度、リベンジのゴルフをやって、世界一標高の高いゴルフ場のスコアカードをホルダーの中に納めたい気持ちが日に日に募ってきます。ラパスに比べると、コチャバンバのゴルフ場は、2800 メートルといっても、全然楽です。

空気も乾燥していて、ボールも良く飛び、快適です。320 ヤードのパー4 のミドルホールのティーショットは、めったにない会心の当たりでしたが、何と、グリーン右奥にこぼれていたのです。

サンタクルスのラス・パルマスカントリークラブは、標高 400 メートルの熱帯雨林地帯にありますから、空気が重い感じがします。

ここは深いラフと乾季の強い南風(スール)に泣かされます。

アウト2番の120ヤードの池越えのショートホールは、北風(ノルテ)の時は、サンドで十分なのが、スールの強い時は5番アイアンを持出してもいいくらいです。クラブライフは楽しいものがありました。街の中心から車で、10分のところにあるので、お客さんを連れて昼食だけに出かけたり、家族と一日中プールサイドで過ごしたり、外に、サッカーグラウンド1面、テニスコート2面、スカッシュコート1面とゴルフだけでなく、いろいろな過ごし方を提供してくれています。

圧巻は大晦日から元旦の朝まで続くドンチャン騒ぎの仮面舞踏会です。

クリスマス・イブは家族だけで和やかに過ごし、大晦日は、仮装して、飲んで、踊ってのまさに無礼講で、疲れ果て朝焼けを眩しく感じながらのご帰還となります。

メンバーは、州知事も、参謀総長も、

電力会社の総裁もファーストネームで呼び合い、皆同格に扱われます。

日本のゴルフクラブは、クラブとはいっても会員相互の交流も、家族と一緒に休日を過ごせる配慮にも希薄であったり、中には、金儲けの手段としてのクラブ経営で、会員を食い物にするところさえあります。

ニュースや自分が足を運んだ場所で、そんな状況に触れる度に、ラス・パルマスカントリークラブの楽しかったクラブライフが懐かしく思い出され、時には、「発展途上国はいったいどっちなんだろう」と思ってしまうたりするのです。

## じゃがいもの旅の物語-その2- インカからシバングまで

杉田房子

アンデス山地の畑から収穫されたじゃがいもを乾燥させて作るチュノ。女たちは、足首まで覆う長い腰布をすねまでからげて、畑でじゃがいもを踏む。足の裏に力を集中し、にじみ出る水気を絞り尽くすと黒い石さながらになり、カビも生えず、腐らない。足元を見つめていた女達の目が野道を走ってくる男達の姿を捉えた。踏む足を止め、野道に向かう女たちは「どうしたんだろう」と口々につぶやく。畑にいた男たちは、走ってくる男達のほうへ向かい動き出した。

「誰か迎えにいけ」

村人たちの中で年配の男が言った。

「あとのものは、村で支度をするのだ」

男達は2つに散る。最初に叫んだ早口の男が走ってきて、年配の男に呼びかけた。

「村長さま。あれはチャスキー（飛脚）です」

村長と呼ばれた年配の男が頷いた。

アンデスの村では、村長は絶対とされている。幾つかの村が集まった郡、郡の上に県、県を束ねる地方、その全てに君臨するインカの皇帝という制度は厳然

としていたが、インカ族がアンデスを支配する前から村は存在し、村長に率いられて何千年、何万年を過ごしてきている。インディオにとって、村は生きていく拠り所であり、村長は毎日の暮らしの導き手だった。

「とうとうチャスキーが来たか」

その導き手がつぶやく暗い響きに、早口の男も、女たちも、顔をこわばらせた。

インカの皇帝は、公動沿いの1日行程おきに宿場を設け、そこにチャスキーと呼ぶ若者を置いた。急ぎの通信は、この若者達の飛脚便で伝える。文字を持たないインディオにとって、チャスキーの飛脚便は最も早く、重要で、正確な通信だったが、めったなことでは山間に散らばる村までやってこない。

「チュノも、もうほぼできたようだな」

気を変えるように畑を見渡す村長の言葉に、女達はわれに返った。

「そろそろ、取り入れておこう」

ざわめく女たちを背に、村長は野道を引き返した。畑の外れに家が群がっている。泥を塗り固めたアドベ壁に、草葺の屋根。家並みの向こうが段々畑となって落ち込む際に立っている神殿。アドベ煉瓦を積んだ神殿がほの白く見えるのは、広場に干されている白いチュノが陽光に映えているからだろう。

静かで平穏な村の光景は、文字のないインディオが長老の語りつぎで知る音そのままだが、今広場に広げられている白いチュノが出きるまでのここ1年近くは、穏やかではすまなかった。雨季になっても雨が降らない。家畜のラマを犠牲に雨季の祭りをしたら、地震が2度も起きて段々畑が崩れた。長老は、地震があれば雨が降るといふ。やがて雨は振り出したが氷雨まで降って、トウモロコシやじゃがいもの芽を凍らせた。そして、身も凍る話を、作柄を調べにくる役人が持ってきた。

われらの皇帝は、西の海から現れた白い肌をした人の虜になった。皇帝が崇める神ピラコチャも、われらのはるかな

祖先ピラコチャも白い肌だった。神であり、祖先でもあるピラコチャは強く賢く、わららに暮らす知恵と力を授けた後、西の海に去っていった。今後、その海から現れた白い肌の人ピラコチャも強い。インディオの戦士は、雷音とともに火を吐く腕で一撃のもとに殺された。白い肌の人ピラコチャも賢い。だから皇帝さえ虜になった。皇帝を自由にするためには、たぶん、ピラコチャに途方もなく捧げものをしなければならぬだろう。

チャスキーの飛脚は、その消息に違いなかった。村人に囲まれたチャスキーが近づくの、神殿前の広場で待つ村長は、広げられた白いチュノの眩しさからか、重苦しい物思いからか顔をしかめていた。

## **サンタクルス の思い出 ハイパーインフレ**

林和範

私のサンタクルス勤務中での最大の思い出は、なんといっても「ハイパーインフレ」でしょう。着任時(1982年)の直前から現地通貨が崩れ始め、着任した時は確か1ドル=54ペソだったと記憶していますが、約4年の勤務を終え帰国する際には1ドル=230万ペソにもなっていました。

JICAに勤務して以来、中南米を始めとしてアフリカ、アジアの経済動向には関心はありましたが、一般に開発途上国では自国通貨の維持ができず為替下落になる傾向があることは承知しており、その対応にもそれなりに慣れているつもりでした。

ただ、これほどにすさまじいインフレは現地にいた私にも理解しがたいことですから、ましてや日本に居住して比較的安定した経済の中に身を置く日本人には、このハイパーインフレが業務をする上でも日常生活を営む上でも、どのような影響が出てくるのかを想像することは多分困難なことでしょう。

当時のことを2つの事例で紹介してみよう。第1は、当時のインフレが続く中、当然のこととして外貨の闇交換レートが発生します。外貨交換の際に発生する売り買いのレート差額を生活の糧にする所謂「カンビスタ」が街中の至る所に登場してきます。サンタクルス市の中心にあるプラサ・セントラルの外回りにも、1メートルおきにカンビスタが立ちます。当方も出きるだけ良いレートで交換したほうが良いわけですから、最初のカンビスタから順に右回りに交換レートを確認していきます。一人一人に聞いていくわけですから一回りするのに小1時間はかかります。一回りして、最初のカンビスタに戻ると先ほど聞いたレートがいつのまにか更に下落しているというのですから、最善のレートを求め続ければ、ぐるぐる回りを中止することが不可能になるわけです。

最終的には、どこかで決断して交換することになるわけですが、交換した後もなんとなく心残りがするわけです。防衛手段としては1回の交換額を少額にして、こまめにプラサに出かけるしか方法はありません。

また、当時でも既に町中や郊外にスーパーマーケットがありましたが、品物の販売価格の表示がペソ表示で、計算も支払いも簡単でした。当時の政府は国内でのドル取引を禁止していたためにペソ表示にせざるを得なかったのでしょう。その後は、スーパーのオーナーも政府の方針に従いながらも表示価格の修正作業を省力化するために全てドル表示になりました。精算の際にレジの係員が集計した後に、更に電卓を片手に当日のレートでペソ額をはじき出すわけです。当時はドルでの支払いは出来ませんでした(ちなみに2002年3月にサンタクルス市を訪問した際にはガソリンスタンドでもスーパーマーケットでもドル貨で支払いが可能でした)。

第2の事例は、当時は政府もインフレに対処するため高額紙幣の印刷に追わ



れていました。当時のポリビアには紙幣の印刷技術が無かったためスペインに印刷を依頼していたそうで、当時の国家予算の30%以上が紙幣の印刷費用であったと聞いています。

当初は100ペソ紙幣が最高額であったため、支払いには大量枚数の紙幣が必要でした。通常は100ペソ札を10枚重ねて二つ折りにし、それを交互に10個重ねて紐で縛り持ち歩いたものです(6×6.30センチ位か?)。仕事を終えて帰りに飲み屋に出かける場合には肩から掛ける旅行用鞆に5、6本押し込んでおくのですが、調子よく飲んでると支払いが心配になるため、鞆のサイズが徐々に大きくなっていったものです。ドル換算すると、それでもせいぜい50ドルぐらいでした。

帰国直前には500万ペソ札が出まわっていました。実際には紙幣ではなく中央銀行発行の小切手で、紙質も悪く、使っている内に文字が磨り減って読み取りずらくなるような代物です。

また、JICAが運営していたサンフアン診療所から定期的にサンタクルス市の薬局へ薬品類を購入しに行きますが、行く時はダンボールいっぱいのお札を持参しますが、帰りには箱に半分ほどの薬品を詰めて帰るわけです。

多分、こんな経験は今後することは無いでしょうし、したくもありません。デフレスパイラル状況にある現在の日本とは大違いですが-----。

## **ポリビアのワイン**

ホセ・ルイス・ビダル・西原  
田中ネリ 記

ポリビアのワインを語るに当たってまずポリビアにおけるワイン生産の歴史から始めよう。ポリビアのブドウ栽培は1550年から1570年頃、ちょうどスペイン人が南アメリカを征服中だった時代にアウグスト教会の宣教師によって

始められた。当時は宗教的な目的でコチャバンバ州の小さな村のミスケでワインが作られたが、やがて16世紀に入ってからワイン生産はポトシの南部に位置する渓谷地帯にも広がっていき、最盛期にはポトシ市が、宣教師とスペイン人によって作られたワインの中心的な取引の場となった。そのワインにはミユスカ・アレキサンドリア種のブドウのみが用いられていた。

現在は、ポリビア南部のタリハが国内最大の生産地であり、タリハの中央渓谷地帯はブドウ生産地として世界で特別な地位を誇る。何故ならば南米の中心に位置する人口800万人のポリビアはネパールに続いて海拔が世界で2番目に高い国であり、ブドウを栽培する地としては世界で最も高い。ポリビアのぶどう栽培の立地条件こそはワインの品質にもつながっており、海拔1700から2800メートルに育つブドウは強い太陽の紫外線を浴びることでその実は格別に豊かな香りを醸し出し、これがまさにポリビアワインの独特な味と品質を作り出している。

2月頃に完熟する実の房の重みで枝がたわんでいるブドウの木々の光景はタリハ市外へと広がり、その周辺に位置するワイン工場では木製の樽の中で眠りながら円熟期を待つワインが格別の香りを放っている。

次に、幾つかのポリビアワインのブランド名を挙げよう。カベルネ・ソビニオン、ペドロ・ヒメネス、アランフェス、ナリネーラ、コールベル、ダスピット、セミリオン等がある。ポリビアワインがいずれ日本市場に進出して、日本の皆様もこのワインの素晴らしさを満喫できることを切に願っている。

### 筆者紹介

ホセ・ルイス・ビダル・西原 (José Luis Vidal Nishihara) は、11年前から日本に在住する日系二世で、現在工場で働く傍ら音楽活動を続けている。ビダル西原が

ディレクターを務めるボリビア人の音楽バンド「ソニド・ラティーノ (Sonido Latino)」はラテンアメリカ音楽やフォルクローレを日本で11年間演奏している。全員がボリビア人であるこのバンドは、キーボード、パーカッション、ギター、バスと2名のボーカルの6人編成である。住所 神奈川県平塚市四ノ宮 3-5-21 携帯 090-8082-3002

## **ボリビアとペルーの独立記念日を祝うイベント**

CGBJ 田中ネリ

今年も祖国の独立記念日を祝うイベントが8月4日に実施されました。

このイベントは平塚のカトリックラテンアメリカ人共同体によって企画され、後援はペルー大使館、ボリビア大使館、ボリビア人団体協議会 (Coordinadora de Grupos Bolivianos en Japón 【CGBJ】) によるものでした。

平塚のカトリックラテンアメリカ人共同体は平塚教会で毎月第4日曜日に行われるスペイン語のミサを中心に自然発生的に生まれ、主にボリビア人とペルー人で構成されています。共同体として厳密に組織立っているものではないのですが、民主的なやり方で会長の国籍は1年ごとに代わり、今年はペルー人のビデルボ・ルイス氏が任命され、コミュニティーのために積極的に活動されています。

昨年、CGBJ が企画したイベント同様、今年もサッカー大会で開始し、ボリビア杯はボリビア大使館の2等書記官パブロ・モンテネグロ氏によって優勝者に渡され、ペルー杯はペルー大使館の顧問セサル・ホルダン・パロミーノ氏によって準優勝者に、そしてCGBJ杯は田中ネリによって3位のチームに渡されました。

今回のイベントに参加して幾つか意義あるものを感じたので述べさせていただきます。まず、最近就任されたモンテネグロ氏 (故ワルテル・モンテネグロ

氏のご息様) はご家族と共に訪れ、ホルダン氏と共に当日集まっている人々と気楽にお話をされている光景は非常に和やかで大使館と在日している国民との接近を感じさせるものでした。

第2に、ペルーの独立記念日は7月28日、ボリビアは8月6日で、両独立記念日を合同で祝ったこのイベントは、両国の違いではなく、むしろ共通性と連帯を強調するものであったゆえ、大変意義深かったと思われます。

そして第3に、このたびCGBJは音楽のプログラム企画でこのイベントを後援しましたが、そのプログラムの間に観客から何人も自発的に歌を披露する場面もあり、特に小学生の男の子が南米の歌を歌った時は皆から喝采が生じて感動的な場面でした。これこそ我々CGBJが目指している目的でした。換言すると、祖国の経済事情により単純労働者として来日したラテンアメリカ人の多くは自尊心の傷つきやすさを負っているのが伺えます。しかしながら、彼らには誰にも負けない文化的芸術財産を有しており、その財産の開拓こそ彼らが健全なアイデンティティーを回復する一つの道であると思われます。芸術は言葉を超越する掛け橋として日本人とラテンアメリカ人とのコミュニケーションの一手段になればとCGBJは願っています。

### **原稿募集中!**

皆様から素晴らしい原稿を書いていただき、おかげさまで紙面は充実しています。「ボリビアと私」とかボリビアについての原稿を是非事務局にお届け下さい。字数は多くても少なくてもかまいません。

### **編集委員**

鎌田甲一 杉田房子 細野豊